

京極読書新聞 <第30号>

発行日 平成24年 2月 1日(水)
京極町生涯学習センター湧学館

余談「平清盛」(1)

<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一 (むらやま・こういち)



NHK大河ドラマ「平清盛」がスタートしました。これを機に「京極読書新聞」の紙面をお借りして、この<余談「平清盛」>というコーナーを設けさせていただきました。ドラマを観ての雑感や清盛にまつわるエピソードなどを「まあ、余談ではありませんが……」という気持ちを込めて綴っていきたいと考えています。時々、蘊蓄めいたり偉そうなることを書くかも知れませんが、あくまでも“余談”ですので読み飛ばしていただければ幸いです。ちなみに、ここでの“余談”の<余>は「余分なこと」の<余>であり、「余計なお世話」の<余>です。念のため。

1月8日第1回「二人の父」を観ました。

まず感じたことは「ずいぶん慌ただしい展開だなあ」ということでした。1回の分量の中で、当時の武士が貴族の「番犬」としていかに蔑まれ、虐げられた存在であったかを強調したかったからでしょう。また、ほとんど説明のないままに多くの、しかも重要な人物が一挙に登場してしまうのも、慌ただしさの要因だったように思われます。記憶に残っただけで源頼朝、北条政子、平正盛、平忠盛、平忠正、平家貞、源為義、宗子、祇園女御、待賢門院璋子、鳥羽上皇そして白河法皇といった人々が、次々と登場しました。これらの人々はこれから度々登場するはずですが、第1回目で「まずは顔みせ」といった趣です。それだけに、歴史好きのオジサンか、“歴女”諸嬢ででもなければ混乱しそうです。

もう一つは、予想どおりというか当然といえば当然なのですが、このドラマは実在の歴史上の人物平清盛の“伝記”でもなく、古典『平家物語』でもない全く別の物語である、ということですから。まさに脚本家藤本有紀氏のオリジナル作品です。この点をしっかりと頭においておかないと、色々と違和感を抱くことになるでしょう。ドラマですからどんな清盛が出現しても驚きません(と、思っはいます)。今のところ反抗的で、非行に奔りそうな“無頼漢”清盛ですが、これも、まあいいでしょう。ただし、彼(と

呼ぶのも畏れ多いことではあります)が本当に自身の出生に関して父や継母に、また武士という身分に、あるいは権威や権力に、そして平安時代の王朝的秩序そのものに対して反抗的であったかどうかは、もちろん分かりません。しかし、少なくとも従来の傲岸不遜、悪逆非道というステレオタイプの清盛観は払拭されそうです。

さて、一回目を観るかぎり少年清盛の反抗的言動の原因が「二人の父」にあるという設定です。自分の出生の秘密を知り、悩み、父や継母(大人という権威)に対する不信感の表現として反抗的になる……という設定のようです。この父と子という設定は吉川英治の名作『新平家物語』でも大きなテーマとなっていますが、親子関係、家庭・家族問題というテーマは、多分に近現代文学的なテーマです。それはともかく、清盛の父母は誰なのかという問題は古くからあります。かなり煩雑ですが簡単に整理すると、

- (1) 『平家物語』(「覚一本」「四部合戦状本」)
→ 父白河院 母祇園女御
- (2) 『平家物語』(「屋代本」)
→ 父白河院 母祇園/辺ナル或女房
- (3) 『源平盛衰記』(『平家物語』の異本)
→ 父白河院 母兵衛佐局
- (4) 「仏舍利相承系図」
→ 父白河院 母祇園女御の妹

というところでしょうか。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

2ページ目に続きます

余談「平清盛」(1)

1ページ目からの続きです

いずれも父が白河院となっていることから、清盛“皇胤(天皇や院の子)説”が流布することになります。母は異同もありますが、現在では「祇園女御の妹」説が有力です。(4)の「仏舎利相承系図」(仏舎利[お釈迦様の骨]が白河法皇から祇園女御、その妹を経て清盛に伝えられたことを示した系図)の信憑性を疑う声も強いとのことですが、『中右記』(中御門右大臣宗忠)という貴族の日記に清盛が3歳の時、忠盛の妻が急死した記録があり、妻とされる人物については仙院(院の御所)のわたり<の女房とのみ書かれているということです。祇園女御はかなり長命なので、清盛の母は少なくとも祇園女御ではないということになります。この日記が祇園女御の妹説の根拠になっています。「急死」というところが、多少ミステリアスではありますが、このドラマのように、事もあろうに院の御所内で北面の武士の手によって射殺されたというような事件はなかったと思います。ところが、この日記には父が誰なのかには触れていません。白河院かも知れないし、忠盛かも知れないということなのです。では“皇胤説”論争は現在どのようになっているのでしょうか。これもごく簡単に触れておきます。いずれも代表的な史学系の『平家』研究者の方々(敬称略)の見解です。



(サライ2009年4月2日号より)

皇胤説を

- ・五味文彦(日本中世史) → 否定的
- ・高橋昌明(日本中世史) → 肯定的
〈昇進の異例の速さを根拠に〉
- ・元木泰雄(政治史) → 周辺認知は肯定
〈昇進速度は根拠とはならない。当時の清盛周辺の人々は認知していたという意味で肯定〉
- ・上横手雅敬(日本中世史) → 肯定的
〈「仏舎利相承系図」を評価〉
- ・樋口大祐(人文社会系) → 不明
- ・上杉和彦(日本中世史) → 真偽確定のすべはない

以上のような具合ですが、これらの方々それぞれに学問的裏付けや根拠をもって下している結論だけに、一般の私たちとしては判断に迷うところでは。

『平家物語』(以下『平家』と略)をある程度知っている私たちは、人物や事件についてどうしても『平家』に寄り添って考えたり、判断したりしがちですが、『平家』もかなりの部分がフィクションです。したがって、中世軍記物語である『平家』の清盛も現代小説である『新平家物語』(以下『新平家』と略)の清盛も、そして大河ドラマに登場する清盛も、結局は作者が創り出した人物像ということになります。では、「清盛の実像は」となると、今のところ「分からない」といわざるをえません。もちろん、近年の歴史研究の成果は顕著で、ある程度の“実像”が姿を見せはじめています。さらに最近では国文学と歴史学が一体となった『平家』研究も進められていると聞きます。その成果を楽しみにしつつ、一方で大河ドラマを通じて最も新しい清盛像にも触れていきたいと思います。

<以下次号>

《参考図書》 *印は湧学館所蔵

- | | |
|----------------------------------|------------------------------------|
| *『平家物語大事典』(東京書籍) | ・『平家物語研究事典』(明治書院) |
| *『平家物語図典』(小学館) | ・『平清盛』(五味文彦・吉川弘文館) |
| *『平清盛小事典』(勉誠社) | ・『変貌する清盛』(樋口大祐・吉川弘文館) |
| *『有職故実大辞典』(吉川弘文館) | ・『平家の群像』(高橋昌明・岩波新書) |
| *『平家物語全訳注』①～⑩
(杉本圭三郎・講談社学術文庫) | ・『歴史に裏切られた武士 平清盛』
(上杉和彦・アスキー新書) |
| *『平清盛』(別冊「太陽」) | |





湧学館の 『平家物語』 コレクションから (中)

〈『平家物語』を読む会〉講師 村山功一

■『平家物語』板坂燿子／著 913.4イタ

江戸文学を専門とする著者による斬新な『平家物語』論。物語のあらすじを辿りながら、善悪、賢愚の対象として描かれる父清盛と嫡子重盛、兄宗盛と弟知盛の人物像に触れ、そこから導かれる作者の意図を考察する。

『平家物語』(以下『平家』)は“国民の文学”として親しまれているはずだが、著者が身を置く大学という環境(教員・学生・院生を含めて)においてさえ、全巻をしっかりと読んでいる人は少ないという。『平家』の魅力、文学としてのすばらしさは、ともかくも読んでみなければ分からないと述べ、そのためには、まずあらすじを辿ることが重要と主張する。



第一部「受験勉強的あらすじ暗記法」では、『平家』を読みはじめ途中で投げ出してしまう原因として、著者は登場人物の多さと、合戦の多さを挙げている。その上で「受験勉強的」あらすじの暗記法として、〈平家都落〉(巻七)を中心にそれ以前に起こった三つの反乱(鹿ヶ谷(巻一))、〈高倉宮〔以仁王〕(巻四))、〈頼朝旗上(巻五)〉を挙げ、巻七以後に三つの戦い(一の谷(巻九))、〈屋島(巻十一)〉〈壇の浦(巻十一)〉を挙げている。そして、これだけはこの流れに則してしっかりと暗記してしまうことを勧めている。

第二部「図式で覚える内容と構成」では〈人物造型の対立関係〉から、清盛対重盛、宗盛対知盛の対比を通して『平家』の構造を探る。

また、『平家物語』には常に聴き手や読者の疑問や興味に丁寧に答ようとする姿勢があるとして、ある事件や合戦などについて、不要とも思われるほどその経緯や由来やあるいは“言い訳”を述べる『平家』の律儀さに着目するなど、ユニークな視点も新鮮である。

もちろん、専門とする江戸文学の近松の戯曲、馬琴の小説、芭蕉に見られる『平家』についての考察もあり、まさに、サブタイトルが示すように「あらすじで楽しむ」『平家』論である。

■『平家物語を読む』川合康／編 913.4ヘイ

著書に『源平合戦の虚像を剥ぐ』を持つ日本中世史の専門家、川合康氏の編集による研究書。11人の中世史、中世文学研究者の論文からなる。『平家物語』の描写から、その虚像と実像を解明する。最新の歴史・文学の研究成果を踏まえた古典『平家』の新しい読み方を示す。



■『建礼門院という悲劇』佐伯真一／著 913.4サエ

詩的なタイトルのこの本は、中世文学者佐伯真一氏の論考である。

このところ『平家』の史料的価値を見直す(少なくとも荒唐無稽なフィクションとだけ考えるのではない)傾向にあり、実証史学の立場から『平家』の描く時代や人物や合戦などを明らかにしようとする動きが活発であるように思われる。

これに対し、あくまでも文学としての『平家』に描かれた建礼門院徳子の、華やかでそして哀しい激動の生涯を掘り下げ、徳子の心の底に迫ろうとするのが本書である。

その“実像”はもとより分からないが、建礼門院に近侍した右京太夫は共に正装した高倉帝と中宮徳子を目の当たりにして〈天上の日月の光〉のようだと家集(個人的な歌集)『建礼門院右京太夫集』に和歌を残している。まるで雲の上の存在であった徳子が、絶頂から奈落の底に転落してしまうという生涯は周知のとおりである。もちろんそれは『平家』の語るところだ。国母(天皇の生母)建礼門院は、はからずも壇の浦の海中から引き上げられ孤独な敗者として都に生還するが、ほどなく山深い大原の里寂光院に入る。そこに、あるうことか平家を滅ぼした張本人の後白河法皇が訪れる。有名な灌頂巻「大原御幸」である。ここで徳子は、自分は生きながらにして六道(天・人・地獄・餓鬼・畜生・修羅)を巡ったと語る。本書の中心はこの“六道語り”の分析、考察にある。さらに、建礼門院説話と小野小町説話を検討することにより、中世女性の精神世界を探り、こうした説話や物語が作られ、語られてゆく古代末期から中世の姿に言及する。



著者は《本書は、物語の記述という危うい土台の上に「建礼門院の実像」を築こうとするのではなく、物語の中の建礼門院がなぜそのように語られたかを考える》と、その目標を明らかにしている。つまり、『語る建礼門院』を語る物語として『平家』をとらえようとする試みである。

中世文学を専門とする著者のすぐれた『平家』文学論として、一読を薦めたい。

大盛況！ 「きょうごくの歴史」上映会



▲視聴覚ホール初！ 立ち見客まで出た1月27日の上映会

寄せられた感想(一部分)

■この度の映写会、昭和生れの者にとってなつかしい映像ばかりでした。脇方鉱山そのものははっきりわかりませんが、家内が脇方生れ、脇方育ちなので、当時の話をいつも聞かされておりました。改めて映像を見る限り感動しました。このような映写会、再度再々度あっていいと思います。

■小学校の映像を見た時、私の出身校ではなかったのですがなつかしく子供の頃を思い出し涙が出そうでした。

■京極町が栄えていた最高の時期を見たような気がします。どんどん学校が開校になり、さびしくなっていたことも思い出しましたが、何かまだ大丈夫というような 今まで築いて下さった京極町(先人の方)に感謝し、これからも何かを残していきたいものですね。またこのようなビデオを見る機会があることを楽しみにしています。ありがとうございました。

■なつかしいなつかしい場面の数、またなつかしい人たち…。昔々の場面、人々、とてもよかったです。大切に保管しておいてくださいね。また見る機会があればよいです。まだまだ

たくさんの人達が見られるとよいと思います。なつかしい顔、人に会えてよかった。

■なつかしい風景に昔を遠く思い出しました。今ではもう見る事のできない町の姿にふと淋しく思います。昔の事を残しておく事の大切さ、私もうまれ育った東花の山をととても大切に思っています。いつまでもなくされない姿を、今後も大事にしていきたいですね。とてもよかったです。今後も京極の姿を撮り続けてもらいたいです。ありがとうございました。

■前に座った方達が、たねいもまきで「おれもしたことあんだ」と懐かしそうでした。歴史をこのような形で迎えられるというのはいいですね。ありがとうございました。

■感激 感涙 胸一杯

<上映内容> *このDVDは湧学館で視聴できます

「映画希望のまち」

…昭和51年度制作/35分

「開基80周年記念式典」

…昭和51年8月30日開催/18分

「各学校校舎(東花・錦・更進・北岡・南京極)と脇方鉱山跡」…7分

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

